

中間報告を読んで!!

昨年6月のバリスト突入以来、大学改革についての様々な論議がなされてきたがこの程改革準備委員会の中間報告が配布されそれについて学内のあらゆる所で討論が進められている様であるが以下にこの中間報告についての体育会への所信を表明したい。

まず第一に改革準備委員会が中間報告起草の為にスタートした7月と言えは学内が学園封鎖という非日常的状态であったということに我々は念頭におかなければならない。この様な状況下で早急に現実に即したしかも実質的に改革可能な方策を得なければならなかった。それ故この中間報告はその内容を見れば当然のことながら余りにも短期的な展望に立った急場しのぎの改革案の感をぬぐいざりえないのである。戦後新制大学が発足して以来、現在に至る迄様々な矛盾を内在していたにもかかわらずなんらの措置をもとりにえなかったという学校当局の怠慢さも同時に追及されねばならない。そこで我々が考えるには創立以来80有余年に亘って積み重ねられた諸々の弊害を打破ししかも現在の社会に留ることなく過去を正しく見詰め未来の社会をも想定したところの長期的な展望に立ち「開かれた大学」として脱皮するために主体的・独創的な改革案の創出が必要なのではなからうか。

次にこの中間報告が学生参加を抜きにして成案をみるに到っている点である。この点については現在出されている中間報告はあくまでも教職員及び学生の討議の素材として作成されているのであり、今後の大学改革の一方向性を示すための「たたき台」として存在するのだという学校当局の見解があるが我々はこの見解については非常に疑問を感じるのである。なぜなら大学は教職員・学生の自治によって成り立っており、又学生の間にも様々な問題点があるにもかかわらず今回の中間報告作成にあたって学生の代表が参加していないということだけはなだ遺憾である。それに学長みづからが大学の真のウイングには学生の清新な問題提起によってあらためられてゆくべきであり大学のつねに生き生きとした充実発展のためにその積極的役割を期待する...」と語ったいながら現実においては学生会中央執行委員会が公表した規約に基いた正しい運営を行っていないがために正当な代表としての資格に重大な疑義を感ずるといふ見解を述べ一方ではあくまでも形式論にこだわり学生の代表として現在の機能的に崩壊した学生中核の構成員をその代表の対象とすることに固執ししかもすべての学生自治団体及び学生一般の自治の現状をも憂慮するといふような現状認識の曖昧さ等を考える場合、中間報告についての我々の意見を反映させる場がなくなるのではないか、なしくづ的に現在の中間報告が学生不在のままて成立をみるのでは、と考えるのは我々の思ひごとであろうか。しかしまた大学当局にこの様な口実を与えた根本原因である現在の中核の崩壊は我々学生一般の無関心さの結果としてあるのだということに認識せねばならぬだろう。

以上の様な点を考慮に入れ我々体育会は今回提出された中間報告に基本的に反対意見を表明するものである。わがわがは今回の中間報告が教職員・学生の討論によって再検討されることを要望し今後発足するであろう改革委員会に暫定措置として有志団体(文連・理科連・応援団・体育会)を中核とする学生代表団を参画させられんことを要望する。

尚中間報告の個々の問題についての体育会の見解は現在準備中であり早急に明らかにする遺憾である。

最後に我々体育会は学内改革の為に今後とも前向きな姿勢で諸々の問題についてとりくんでゆく決意である。

以上